

都道府県別賞一等

「少しでも」

千葉県 鎌ヶ谷市立第四中学校 二学年

高橋 音羽

夏の畑はとにかく元気いっぱいだ。葉は大きくなり、実は輝く。私の家では長期休みのときに祖父母の家に行く。祖父母は農家で、畑と一緒に野菜を収穫することもある。祖母の家に行くと、とても体も心も休まる。祖父母はとても元気で、朝早くから野菜に水をやり、午前中に野菜を収穫し、午後は家の前の直売所に野菜を並べる、と多くのことをこなす。祖母はどんな作業をしていても笑顔だった。そんな、いつも元気で笑顔だった祖母は三年前に亡くなってしまった。祖母は入院する前日まで元気に畑仕事をしていたらしい。冬休みに祖母の家を訪れたときに

「また来年の夏休みにおいでね。」

と笑顔で言われた言葉が最後の言葉になった。

私の祖母は、とても大きな畑を持っていた。畑ではナスやトマト、オクラを育てていた。夏には青々とした葉が一面に広がり、実がピカピカと輝いていた。そんな畑の中で祖母と一緒に畑で野菜を収穫する。

「根本を持って、手首をクイツとするの。」

と収穫の仕方を丁寧に教えてくれた。夜は祖母と兄弟と一緒に寝ることもあった。朝起きたら、美味しいご飯ができていて

「今日は何かしたい」とある。」

と一日の予定を話す。来年は祖母と何をしよう、と当たり前のように考えていた。祖母はいつまでも元気で、ずっと笑顔なのだと思った。

祖母が倒れ入院し、病院に行く途中

「おばあちゃんに最後の挨拶に行くよ。」

と言われた。祖母はベッドで目を閉じ、苦しそうに息をしていた。祖母が亡くなったのは二時間後だった。私は信じられなかった。元気な祖母が亡くなるわけがない、と心が受け入れなかった。しかし、時間は待つことなく進む。お通夜が終わった。目を閉じ、青白くなってしまった祖母の体と、父が泣いていた姿がずっと頭に焼き付いて離れなかった。祖母とはもう会えないという事実を認めるしかなかった。次の日は学校があるのでそのまま家に帰った。帰ってからの日常はいつも通りだった。ただ、父は一カ月に一回ほど実家に帰るようになった。話を聞くと、祖母の畑の引き継ぎとお墓などの準備ということだった。たまに付いていくこともあったが、父と祖父がずっと話していた。

## 第60回中学生作文コンクール

三回忌のときに、両親と祖母について話す機会があった。祖母との思い出や、覚えていないくらい小さい頃の出来事について話した。写真も見せてくれたが祖母はどの写真も笑っていた。そして、父が今までどんなことをしていたかなどを聞かせてもらった。数年間かけて、農業の引き継ぎをしているというのは聞いたが、講習会に参加したりお金の管理だったりをしていたらしい。またお墓を作るのにどうなのがいいか、と祖父と話し合っていたそうだ。話を聞いて一つ思ったことがあった。それは、やはりお金がかかるということだった。お通夜を行うにも、墓石を買うにも、必要なものを揃えるにも、たくさんお金がかかると父が言っていた。祖母は「何かあったときのために」と保険に加入していたらしく、実際保険が下りて「助かった」と父は言っていた。

祖母が亡くなって、その人が亡くなって悲しい、だけで済まないと改めてわかった。親戚への対応、式の計画、手続きや整理などすることはたくさんあり、それらをこなすにはお金も必要になるという現実的な面もあると知ることができた。生命保険は、少しでも長く健康で周りの人と一緒の時間を過ごしたり、死んでしまったあとに大切な人を支えたりするのに必要だと思う。祖母の死は、今日もみんなが健康に生きていることが当たり前ではないと気づかせてくれた。なので、これからのことについて家族としっかり話し合おうと思う。私はみんなと過ごせる一瞬一瞬を当たり前と思わず全力で楽しみたい。